

「30年後のさらにその先の植物科学のために」 別役重之（筑波大学）

だんだんいい年齢？になってきて、時間が経つのが減法早く感じる。しかし30年後とは、植物科学の未来なんてもちろんのこと、自分がどうあるのかさえ、想像し難い。

では、30年後を考える前に、まず逆に30年前。その時、僕はまだ中学生。サッカーに明け暮れ、授業中は授業とは直接関係ない理科や社会の図表ページばかり読んでわくわくしてたっけ。そんな教科書おまけページには、「ポマト」とか「遺伝子組換え農作物で世界が救える」とか。無邪気に「生物の仕組みがわかれば何でも出来る」とそんな未来にワクワクすると同時に、生命の根幹や尊厳を揺るがすような、人はどこまで生命を弄れるようになるんだろう？といった怖さも少し感じてたっけ。まさか自分が、自分自身でそんなワクワクを追いかけたり、山ほど形質転換植物を作って研究したり、まさかその方法を布教してる（教育）なんて思いもしなかった30年前。

でも、いざ30年経ってまさかのそんなワクワクの現場に立っているけど、「植物のこと全てわかった」とは全く程遠い心境。もちろん、30年前は考えられなかったような技術もたくさんあるし、当時とは比較にならないほど知見もあるけど、進むにつれて分野の細分化は進む上に、「山を越えると見えなかった次の山が、」ってのが研究の世界だし、30年後の植物科学なんてわかんない。でも、分野が盛り上がってることが大事と思う。いつの時代でも「30年経ってたくさんわかったけど、やっぱり全貌はわかんない」って思ってしまうのが研究者のサガなのだろうけど、それでも止めずに手を替え、品を替え、ひたすら続けてしまうのもまた研究者。とにかく裾野を広げて、その流れを絶やさないことが大切。最近は学生さんも「研究、

なにそれ?」ってノリが増えてきた。しかも改革続きで落ち着けない大学界限。でも、昔、感じたワクワクを自分で進めることが出来る毎日が幸せ。この先、いかに分析や解析の技術革新が進んでも、いかにAIが人の仕事にとって変わろうが、いかに多忙になろうが、結局、研究は研究者っていう人の存在次第。多忙な中でも、たまに植物そのものを触って感じる「あれ、何でこんな基本的なこと、誰も調べようとしてないんだろう?」ってのがきっと一番大事。研究って「理由を知りたい」、「今より良いものを作りたい」とかいう人の想いで動かされるものはず。そんな植物科学に向けた「人の想い」を育てないと30年後なんて語れないかもしれない。こういうことは個人ではできないからこそ学会に期待したい。

情報化社会や少子化で学会の在り方とかの議論が喧しい昨今。最新の知見や人のコミュニケーションもスマホで。そんな時だからこそ、学会が「人が集まる」という特徴を最大限に生かして「生命の不思議に触れたい、解き明かしたい」という「人の想い」を育むような場になって欲しい。今の分刻みの「研究発表」という形もちろん大事ですが、激務の先生方から若い学生の皆さんまで、日常を忘れてみんなで植物の不思議そのものに触れて（本当の植物持ってきたり、不思議な現象をビデオで見せたり、植物園や森で開催とか?）、あーでもないこーでもないって、スマホの液晶ではなく直接、顔を見て一緒に議論を白熱させるような場。喧嘩になってもいいじゃない。出前授業で出来て、学会でも出来ないわけがない。そしてそんな「植物の面白さに触れた」経験が、きっとさらに将来の研究者の卵を育てて、今の僕らがお目にかかれないような、さらなる次の30年後、その次の30年後の植物科学を作っていくってくれるはず。何の分野の縛りもなく、ただ「植物」というキーワードのみで植物好きが集まってくる植物学会だからこそ期待したい。